

風の末裔シリーズ・4th シーズンの2

～フタリシズカ～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「あれ？」

西南の山岳地帯の手前に広がるブナの森。坂を登るナーガが声を上げた。

樹齢長けた大木に覆われるこの森で、ここだけ小高い丘になっ  
ていて、風出流山かけいするやまがくつきり見える。頂上  
近くの瓦礫のケルンは、五年前ナーガが積み上げた物だ。下  
には父の指輪が眠っている。

父は病に倒れた時も特別な扱いを拒み、里の多くの者と共に  
隔離場所へ移り、周囲の者を励ましながら最期を迎えた。

「母上に助けを頼みましょう！」

移されて行く父に最後に逢ったナーガは訴えた。

「僕は長だよ、風の末裔の。禁忌の羽根に頼るのは違う。あの  
ヒトを困らせる」

「そんな表事を言っている場合ですか。命あつての物種でしょ  
う」

「……解って欲しいなあ。あの白い羽根に頼りたくない僕の気持  
ち。彼がああのヒトを護りたいのまでは許すけれど……」

「……………」

「……」

「父の望み通り、指輪は、この神殿の見える場所に埋めて来ま  
した。本当は母上に届けたかったのだけれど……」

「……………」

母は言葉少なに俯うつむいた。いつもは感情の起伏の激し  
いヒトだけれど、本当の本当に哀しい時は、底が抜けた瓶みた  
いに空っぽになるって事を、ナーガは知っていた。

世界中の風が集まるこの山に、黒死病に関する物の力ケラも  
持ち込んではいけない。あんな言い訳をしていた父だって、詰  
まる所は、その理(ことわり)を守り通したのだ。

「悪魔に憑かれた者の周辺の物品も、残らず焼かねばなりませ  
んでした。母上に渡せる遺品が、何もありません」

「……では、夏草色の馬が欲しいわ。良いでしょう？」

「は、母上?！」

涼しげに言う母に、ナーガはあんぐり口を開けた。

黒死病の渦の中、羽根の他にもうひとつ、例外の存在があっ  
た。

草の馬……。名馬の魂を宿し、蒼の一族の秘法で編み上げられ  
た、生きた草の塊(かたまり)。彼等も病を被る事はなかった。

羅患者の乗っていた馬も、鈴を外してしばらく隔離し、草が生  
え変われば問題なかった。

「でも……」

確かに、蒼の狼の馬は少し前に寿命を終え、今の馬無しの状態は心細かろうと思う。しかし、里を出奔している母に、新たな馬を調達するのは難しい。

「風の聖地の神殿に奉納するとか、そんな名目をでっち上げて下さい。次期長でしよう？」

「はあ……」

このヒトが言い出したら聞かないのも、ナーガは知っていた。

「あのヒトらしいな。賢明だ」

ノスリ長はあっさり承諾した。

「良いんですか？」

「ああ、勿論だ。あの馬はジェット気流が大好きだ。誰が乗っても高空飛行が出来ちまう。もっとも、乗っかっていられればの話だが。要するに、地上から神殿への経路を絶っておきたかったんだ、蒼の狼殿は」

「ああ……」

ナーガはそこで初めて母の考えに気付いた。確かに、カワセミが羽根を背負って悪魔の支配する土地を平気で闊歩していたのに、某なにがしかを思った聡明な部族もいる。そういう者達が、羽根の伝承を辿って神殿に行き着く可能性だって、十二

分にあるのだ。

自分はまだまだだ…。

その後少しして神殿に夏草色の馬を届けたのだが、今、それ以来初めてこの丘を訪れている。

指輪を埋めた時、里から持って来た金鈴花が、きちんと根付いて小さな群落を作っている。里みたいに上手く増えれば、山の中腹の神殿からも、この黄金色が見られるかもしれない。

そんな事を考えながら眺めていたのだが、今日はケルンの下に別の色が見えた。それで思わず『あれ？』と声が出たのだ。

「これは？」

近付いてよく見ると、それは手折られた白い小さな花で、数本束ねてケルンの裾に添えられている。どう見ても風で飛んできた感じじゃない。誰かが供えてくれた物だ。

「母上？ いや、まさか…、滅多な事で山を降りるヒトじゃないっ…」

首を傾げたナーガだったが、ふと横を見て、思考が中断された。そこにいた子供がいない？

「シンリィ?!」

慌てて辺りを見回すと、子供は、丘の下の、森林の切れ目の爪草の中に座り込んでいた。

周りに、フワフワした小さい生き物が囲んでいる。こういう森には大概住んでいる、木霊(こだま)妖精。羽根を珍しげに突ついたり引つ張ったり…。シンリィはなすがままのオモチャになっている。

ナーガは息を吐いて肩を降ろした。あの用心深い木霊があんなにフワフワと集まるなんて、まったく不思議な子供…。

「シンリィー！」

ナーガがもう一度呼ぶと、木霊達はフワフワと森へ帰り、子供は辺りをキョロキョロと見回した。

「こっちだよ、シンリィ、おいで。お祖父様のお墓に参るって教えたよね」

ナーガに誘いざなわれてケルンの前にしゃがんだシンリィは、にわかに瞳を煌きらめめかせて、供えられた白い花に手を伸ばした。

「ああ、シンリィ、それはこの中のヒトの物なの。誰かがあげた気持ちだから、大切にしなげや」

しかしシンリィは白い花に顔を近づけ目を閉じて、嬉しそうに笑った。

「そう、この花が気に入ったの？」

森の下生(したば)えに混じって咲く、名もない地味な花だ。



子供は白い花を持ったまま、しばらくケルンを見つめた。その間にナーガは、深緑の馬を引いて来た。

「これからお祖母様に逢いに行くんだよ。お祖母様にもそんな笑顔を見せてくれればいいんだけど」

シンリィにとって、この世は複雑な分からない記号だらけだ。だけれど、色んな所に色んな仕掛けがひっそりと隠されている。それは、……ちょっと、面白いコト……だった。

\*\*\*

「問題はシンリィの羽根だ」

何日前か、執務室でノスリ長が切り出した。

「我々は羽根の事をほぼ知らない。カワセミは感覚で心得ていたようだったから心配なかったが、シンリィは違う。気を付けてやらねばならない。例えば……」

ノスリはちょっと間を置いて、言葉が口の端から逃げ出さないうように、注意深く喋った。

「その羽根を手放したら、恐ろしい事態になるのか？ とかだ。

……カワセミみたいに……」

そう、シンリィが純粹に誰かを助けたいと思って、羽根がそれに反応する……、十分起こりうる事だ。

「カワセミ長は『悪魔は退けた』って言っていました」

「微妙な言い方だな。どっちとも取れる。やはり聞きに行くのが一番だ。羽根の守り人に」

そんな運びで、ナーガは一日休みを貰って、シンリィを連れ、有翼の祖先の神殿に住む母を訪ねて来たのだ。

シドとソラがエネルギーシユに色々こなしてくれて、執務室は大いに助かっていた。

羽根の事を聞くのも大切だが、ナーガは、母にシンリィを逢わせる事に、大いに期待していた。愛する夫と娘を一度に悪魔に持って行かれてしまった母の心に、この子供が灯(あかり)をともしてくれるに違いない。

ここへ来るまでもそうだったが、シンリィはジェット気流を怖がらなかった。といって、はしゃぐ訳でもない。ナーガの前で大人しくお行儀良く、シンリィ用に鞍に付けたベルトに掴まっていた。

ここで父だったら『サービスサービス♪』とか言ってるアクロバット飛行のひとつでも交えるのだろうか、それはナーガが怖かった。ジェット気流飛行の出来る今だって、全般的に、飛ぶのは苦手だ。里一番の飛び手だった父の才覚は、妹に片寄って受け継がれた。

そういえばユーフィは、父の明晰な頭脳、母の内なる眼の力、

みんなナーガに集中しちゃった……ってボヤいていたっけ。ナーガにしたら、父の運動神経と、母の周囲を慈しんで幸せにする不思議なパワーを受け継いだ妹を、いつも羨ましく思っていたものだが。

「ヒトって無いモノを欲しがるのがかな……」

シンリイがナーガの内懐をチョンチョンと引っ張った。

「あ……」

ほんやりの考え事をしていて、神殿を通り過ぎる所だった。

「ごめんごめん、ありがと、シンリイ」

ナーガは深緑の馬を制して、ゆっくり下降した。

「んん？　ね、シンリイ……？」

シンリイは大人しくベルトにしがみついて、近寄る雪の斜面をじっと見つめている。

「行き先、分かっていたの……？」

程なく、氷の石柱のそびえる雪のテラスに降り立った。シンリイは大きな玄関をぼつと見上げている。

「……？」

いつもは気配で気付いて出迎えてくれる母がいない。

玄関ホールに、蒼の狼の鈴を付けた夏草色の馬が陣取って、二人をギロリと見据えている。

「出掛けている訳ではなさそうだな？」

ナーガはシンリイの手を引いて階段を登り、夏草色の馬の横をすり抜けた。馬は初対面の羽根の子供を鼻息荒く睨み付けたが、シンリイは興味深気に馬を眺めて通り過ぎた。

「……？　あれ……なんだか……？」

ホールから居間を覗き、いつもと違うのに気が付いた。何がどうって訳じゃない。何となく……だ。

例えば、いつもは寝転がってシワが寄ったままの暖炉前の敷物がピンと張られていたり、乱雑に斜めに掛けられていた道具類がきちんと揃えて掛かっていたり。後、必ずその辺にバラバラに転がっていた酒瓶が、まとまって立てられている。

……微妙に……そう、……何だか微妙に、違う……？

その時、居間の奥の衝立ついでたてで仕切られている回廊で、何かが動く気配がした。三枚合わせの衝立の奥は、大きなタライがある水あみ場で、水音と共に湯気が上がっている。

「ああ、湯あみしていたのか」

ナーガはほっとして、二、三步居間に踏み入って、……止まった。衝立の横の衣紋掛けに、明らかに母の物とは違う衣服が掛かっている。

そう……その……どう見たって……男性用の、肌着……。  
「……………!!」

ナーガはシンリィの肩を抱いたまま後退りして、居間を出て扉を閉めた。

\*\*\*

まさかまさかまさかまさかいいいいいい……!!  
ナーガは何回も深呼吸して落ち着こうとした。

蒼の妖精は長く生きる分、人生で何度か連れ合いを亡くしては新たな縁を結んだりする。実際、母には、自分達が生まれる前に亡くした、夫と子供がいたという。

「だからって……」

父が亡くなってまだ五年だ。母に限ってそんな……。

「そうだ、行き倒れた旅人に湯を恵んでいるだけかもしれない  
…、きっと、そうだ!」

孤立峰で行き倒れた旅人もないもんだが、ナーガは無理に納得しようとした。

でも無意識に、お子様のシンリィを後ろに追いやって、もう一度、居間の扉を細く開けた。

よく見ると、衣紋掛けの横の小机に、酒盃が二つ並んでいる。水音の向こうに母の音がする。

「お背中、流しますか?」

ナーガは、扉に手を掛けた仏像のような形のまま、へなへなと後退りした。

そりゃ、母は、息子の自分が言うのも何だが、まだまだ、まだまだ、綺麗で若々しい。だからって、何も、そんな場面に出くわさなかったって、いいじゃないかあ!

コツンと背中に当たったのは、夏草色の馬の鼻面。

「お前も、切なかるう!!」

馬の首をヒシと抱き締めたナーガは、しかし馬の後ろにシンリィを見た。

「…シ……っ?」

と、言った所で、味噌っ歯の子供はニパツと笑って、馬の尻尾を思い切り引っ張った。

夏草色の馬はジャアツと叫んで立ち上がり、開いたままの扉に向かって突進した。

「あ——っ!! 何て事を!!」

蹴り出された馬の後脚からシンリィを庇って伏せたので、ナーガは馬を抑える暇がなかった。馬はそのまま居間に駆け込み、酒瓶を蹴飛ばして、衝立に激突した。

「ぎゃあぁっ!!」

母の悲鳴と、モウモウたる湯気。衝立とタライが破壊されるバキバキという音、ザバアと水の弾ける音……。

ナーガは恐る恐る顔を上げた。仰向けに倒されていたシンリィは、無邪気「ニコニコ」している。

水浸しの居間を見るのも怖いけれど、衝立の向こうを見るのはもっと怖い…。ナーガは腹を決めて振り向いた。

「……」

倒れた衝立の向こうには、白い羽根を持つ母が、薄着で髪をまとめ上げ、腕捲りにたすき掛けをしていたが…一人だった。

「ナ、ナーガ…?!」

呆然と、やっとそれだけ言う。

「母上…一体どうしたっていうんですか？」

ナーガもフワフワと母に近寄る。足がビチャリと音を立てた。

「どうしたって?! それはこっちの台詞です。何だっていうんです?! 何の恨みがあって…あ・あ・あ・もう…!! 敷物も家具も水浸しじゃないの!!」

「す、すみません…」

慌てて謝るナーガの横をすり抜けて、シンリィが蒼の狼に向かって、  
「ニコニコ」とお辞儀をした。「ここへ来る前に『初対面の挨拶』

って奴をよく教え込んで来たのだが、何も今しなくても…。

「じ、じの子…」

狼は興奮覚めやらぬ顔で、子供を凝視した。感動の出会いにするつもりだったのに…、何てこった…。

ガッカリするやら情けないやらのナーガだったが、更にシンリィの手元を見て、驚愕の顔になった。前に突き出したシンリィの両手には、あの白い花が握られていた。

「も、持って来ちゃったのお——?!」

しかし蒼の狼は、その花とシンリィを見比べて、ゆるゆると落ち着きを取り戻した。そして、たすき掛けをほどいて、両腕を大きく開いた。

「おいで…」

シンリィは水浸しの中を躊躇なく裸足でバシャバシャ歩いて、狼の前に立った。

「良く来てくれました…」

狼はやはり水浸しの中、膝を折って、子供をふうわり抱き締めた。

白い羽根も子供を包む。シンリィは安堵の顔で目を閉じた。

\*\*\*

少し時間が流れて狼は立ち上がり、シンリィは目を開けた。

「さー！」

子供の肩を抱いて、水の来ていない椅子とテーブルの方へ誘  
(つねね)



「お菓子食べますか？ ああ、暖かい飲み物の方が良いわね。貴方はここに座って居るのよ。…ナーガ!!」

「は…は…!!」

茫然と突っ立っていた息子は弾かれたように返事した。

「ワタシは着替えて来ます。ここのお掃除をお願いしますね。

馬も繋いでおいて下さる」

「は……う………」

腑に落ちないモノを感じながら、床の掃除をして敷物を絞るナーガの横で、シンリィは言い付け通り椅子から動かないで足をブラブラさせていた。この小悪魔…!!

衝立ついたてやタライも修繕して、ナーガがよつよつ一息付いた頃、狼は優しい風合いの部屋着に着替えて、シンリィの世話をあれこれ焼いていた。

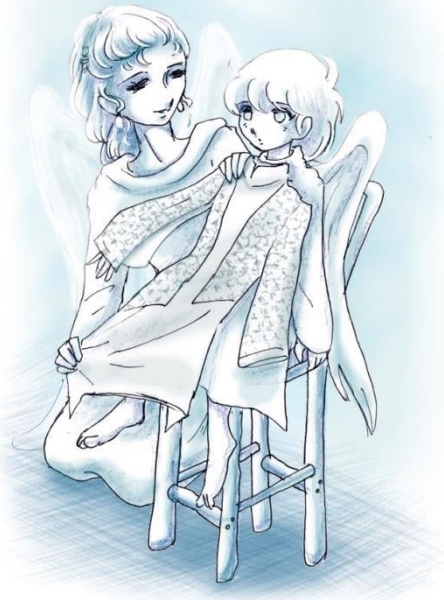
白い花は大切にコップに生けられ、狼はたまにそれを見つめては、嬉しそうに目を細めている。

「あのお…、僕も、お茶を頂いて宜しいでしょうか…」

「ああ、そこにお湯が沸いているから、自分で入れて下さいね」

ナーガの子供の頃の衣服を取っ替え引っ替えシンリィに当ててみながら、母は素っ気なく答えた。

「……………」



取りあえず自分で注いだ紅茶をすすりながら椅子に落ち着いて、ナーガはそっと聞いた。

「お背中流しますか……って、…空耳かなあ…？」

シンリィに菓子を切り分けていた狼は、ヒタリと停止した。

「それに、あれ、どう見たって、男性用の肌着…ですよね？」

暖炉前に、水浸しの床から拾い上げた肌着が情けなさそうに吊るされていた。

「あっあれはっ…ツバクロ殿…、貴方のお父様の物です！」

「はあ？ 父上の？」

確かに、神殿に滞在する事もあったツバクロの衣服が残っていても不思議じゃない…が…。

「あの…えと…。」

ナーガは心配顔で、マシマシと母を見た。

「大丈夫ですか？ 母上…？」

「大丈夫です」

「父上は…亡くなったんですよ…、分かりますよね？」

「ごっこ遊び、です」

「はあ…？」

「だって、退屈だったんですもの!!」

狼は下を向いて真っ赤になって、両手で顔を覆った。

「ツバクロ殿が、夏草色の馬で降りて来て、居間へ誘いさな

って、お酒を勧めて、湯あみの世話を…って、『居る』つもりでやっていました。笑っていいですよ。だって、物凄く退屈だったんですもの！」

「そ、それで…その、『エアーツバクロごっこ』…をやっていましたか？ わざわざ湯まで沸かして？」

「エアーナーガの時も、エアーユーフィ夫妻の時もありました」  
「……………」

ナーガは恥じ入って下を向いた。

父も、妹も、そして大長もいない今、この神殿に足を運べるのは自分だけだった。自分が来ない限り、このヒトはずっと一人なのだ。

「すみません……………あの…」

「いいんです。この子を探すのに、寝食削って全力を注いでいたのでしょうか？ 分かっています」

「いえ、…すみません…僕が駄目なんです」

ナーガは情けない程に、項垂れた。自分はいつもこうだ。ひとつの事に構け過ぎて、大切な事を抜かしてしまう。

「あの時だって…」

つい口をついて出た。そう、あの時、皆のパニックを沈める事だけに集中して、ユーフィに気が行かなかった。あっと思っ

た時には、妹はもういなかった。ずっとずっと……ずっとずっと……戻せない時間が、彼の心に爪を立てている。

「兄は妹を見捨てちゃいけないって、いつも父上に言われているのに……」

突然言い出す息子の額の影を、母は静かに見ていた。

「ナーガ、あの子は、見捨てられたなんて思っていますよ」

「……母上……」

「次期長として里を率いる貴方を、いつも誇りに思っていた筈です。いつだって貴方の助けになりました。だから、自分の子供を救いたいという欲望が先に立った時、身を引いたんです。どんな形でも、里を背負う貴方の助けになる……、それがあの子の喜びです。妹ってそんなものなんです。だから……」

言葉を重ねる毎にナーガが俯うつむいて、これ以上喋ると消えてしまいそうなので、狼は黙った。

そんな彼の下を向いた顔の前に、スプーンが差し出された。妹と同じ瞳の子供が、神妙な顔で覗き込んで、蜂蜜を絡めたスプーンを突き出している。

ナーガはシンリィの頭をクシヤクシヤ撫でて、それを口に含んだ。頬の内側から甘さが染み渡って、身体の芯が溶けそうになった。そうして、今、妹が自分にこの子を遺してくれた事実を、噛みしめる……。

\*\*\*

「ワタシは大丈夫。好きでこの神殿に居るのですもの」  
狼も一緒にシンリィの頭に手を添えた。

「この神殿の前庭から蒼い月を眺めながら、ツバクロ殿の馬頭琴を聞くのが大好きでした。もうこの神殿はワタシの身体の一部なのです」

「……………」

「今日は、そこまで演じるつもりだったのに、邪魔が入ってしまいました」

「はあ……、すみません……」

「歓迎すべき邪魔でしたが」

狼はそう言って、穏やかな顔でシンリィのほっぺの食べかすを拭(ぬぐ)ってあげた。

シンリィの羽根については、狼にも分らないらしい。

「カワセミ殿にも正確には分からなかったと思いますよ。でも、何かあったら、今度は必ず、ワタシに頼って下さい」

「はい」

ナーガは真剣に答えた。

「あの……」

陽が落ちかけて、帰る段になって、ナーガは、ちょっとはにかんで狼に言った。

「馬頭琴、練習します。次、来る時までには、聴ける程度には」

「ふう、楽しみね、ありがとう」

狼は微笑んで、やっとゆっくり息子の顔を見た。

「シンリィ、帰るよ、シンリィー!」

水色の子供が居間から駆けて来た。振り返り、振り返り…。

「お菓子を持たせて貰ったから。一度にあんまり食べるとお腹を壊すぞ」

「何事も経験させなさい」

母の有り難くも無茶苦茶な言葉を頂いて、深緑の馬は二人を乗せて飛び立った。

狼は二人の姿が点になるまで見送って、幸福感を噛み締めながら神殿に戻った。

居間の暖炉の前には……ガ子ガ子歯の根も合わない兄が、背中を丸めてうずくまっていた。

「酷いですよ…。一旦外に誘うとか、方法はあったでしょう?」

湯あみを襲撃された兄は、一瞬を突いて、馬の背中を踏み台に、天井の物置に飛び上がった。隠れたのだった。そして、三人が和やかに談笑している間、半裸で震えながら天井裏に潜む羽

目になっていた。

「あら、ワタシだって『アブナイヒト』を演じざるを得なかったんだから、おアイコですよ」

「おアイコですかあ?!」

狼は罰悪そうに兄にガウンを被せた。

「…すみません。本当は忘れていました」

「本気で?!」

「あの子を抱きしめた途端、あまりに幸福で…」

「天井裏で間男のように震えている兄の事なんか?」

「吹っ飛んでいました。すみません…」

「ふう、まあ…、貴方の忘れっぽさは、昨日今日始まったものじゃないですけどね」

兄は熱い蜂蜜湯をすすりながら、妹を責めるのを止めた。さつき天井裏で聞いた言葉で、帳消しにして余りある。

それからシンリィの持って来た白い花を見やって目を細めた。

「大した子供ですねえ。私が天井に逃げる隙を作ってくれました。あれ、打算じゃなく、ナチュラルにやっているんでしょうかねえ?」

天井に這い上がりながら目が合った仰向けの子供は、ニコニコと笑っているだけだった。

「兄様が蒼の里から身を隠していた理由なんか、あの子には

知る由もないでしょうから。本当に、感覚のまま動いただけなんですしょう」

「…むずが……」

大長は、さっき天井に向かってサヨナラと手を振ってくれた無邪気な瞳を思い出して、口元に笑みがこぼれた。

「…カワセミの血を引いているだけありますねえ」

妹はそれから寝るまで、可愛いシンリィの事を喋りっ放した。った。

昔、兄の事を散々『好好爺(こうこうや)』ってケナしていたのを持ち出してやろうかと思っただけれど、止めておいた。咄嗟に持ち出した『エアー家族』は、実は本当にやった事があるのかもしれない。

思えば『孤高のヒト』に見えがちな妹だが、子供の頃は本当に頼りなげな寂しがり屋だった。そして、その妹を見捨ててしまった自分がいた。今は、その傾けたパズルのピースを埋める為に、神サマがくれたひとときかもしれない。

蒼い月を眺めながら、一人酒の盃を置いて、大長も何かを噛みしめていた。

「私も、馬頭琴、やのまじょうかね……」

月はいつもと同じように、山と森と草原を照らす。

くおまけく

「あれ？」

ナーカはシンリィの胸元から覗く白い花に気付いた。

「残っていたのか。まったく、お供えの花を持って来ちゃうなんて」

子供は懐で、甘い匂いをさせて寝息を立てている。

「…そっいえば、誰が供えてくれたんだろう…？」

大長はテーブルの上の白い花に手をかざして、また目を細める。

「本当に…たいした子供達ですねえ…」

ひとつの莖に二輪の花を咲かせるこの花は、フタリシズカという。同じ根を持つ者同士が密やかに支え合う姿を現している。

シンリィを通した、カワセミからの皆への贈り物だ。

くおしまい

二〇一〇・二・一七

